

## 第4章

メッセージ  
くらしからまちへの伝言

# ヨコハマ！ 生活者のための 都市への再生

### 変わる社会、変わる市民

高齢化の進行、地球規模での環境問題、あるいは情報化・国際化の進展など、私たちの生活を取り巻く社会状況は大きく変化しつつある。このような社会状況の変化は、市民の生活や意識にどのような影響をおよぼしているのだろうか。また市民は変化する社会の中で、どのような生活とまちづくりを望んでいるのだろうか。この項では、現在進んでいる社会の主な変化と、それに関連する市民意識とを概観し、市民が望む横浜のまちや生活のあるべき姿を探ってみることにしたい。

第一の社会変化としては、速いスピードで進む高齢化があげられる。昭和四十五年から平成二年までの二十年間の老年人口比率の伸びは、全国では一・七倍であるのに対し、横浜市は一・九倍と全国平均を上

回っている。この背景のひとつには、昭和三、四十年代における首都圏の人口急増の時代に入ったことがあげられる。高齢化が進む中で、市民は生涯をすこやかに送るための健康づくりはもちろんのこと、寝たきりになっても安心して過ごせる施設の整備や地域ケアシステムの充実、また高齢者が生きがいを感じることでできる環境づくりに高い関心を示している。市民への「三万人アンケート」でも、二〇一〇年頃の市民生活で特に必要なこととして、「障害者や高齢者が安心して暮らせる環境」との回答が一番多く、五三・八％に達していた。

第二の社会変化は、地球規模での自然環境の悪化である。地球の温暖化、森林の消滅など、人間の活動がもたらした環境破壊が深刻化する中、良好な自然環境への関心の高まりとともに、市民の間には、ごみリサイクル活動など身近な環境保全の運動



横浜は開港以来、一貫して国際都市だった。そしていま、新しい時代の国際性が問われている

が広がっている。「三万人アンケート」でも、二〇一〇年頃の横浜のまちの姿で特に望ましいものとして「郊外にまとまった農地や山林の自然が残されていること」（四八・六％）が第二位に、市民生活で特に必要なこととして「緑や水辺の自然環境が守られていること」（四一・一％）が第三位にあげられるなど、生活にうるおいと安らぎの得られる緑の環境保持に、市民の高い関心が寄せられていることがよくわかる。

第三の社会変化は、依然として進む業務金融など社会・経済機能の東京一極集中である。例えば平成二年の横浜市での就従比率（市内を従業地とする者の数と市民就業者数の比率）は七九・八％。これを昭和六十年の八〇・七％と比較すると、五年間で〇・九％低下しているのに対し、東京都区部では平成二年度が一六三・〇％と昭和六十年に比べ一〇・三％増加している。

業務機能の東京一極集中の進行は、横浜経済の自立性をそなっているだけでなく、市内での就業場所の確保や、ゆとりある通勤・通学を困難なものとしているなど、多くの問題を発生させている。「三万人アンケート」で、二〇一〇年頃の横浜のまちの姿で特に望ましいものとして、「新たな鉄道や道路が整備され、快適な通勤・通学が可能になっていること」（四二・六％）をあげた人が多く、第三位という高い順位になっているのが、なにより市民の日々の苦勞を物語っているようだ。

第四の社会変化は、労働時間の短縮化の進行である。週休二日制など労働時間の短

縮は余暇時間の増大をもたらし、仕事中心の生活から、家族や地域の人々との交流や趣味を楽しむなど、ゆとりのある生活に対する関心を高めている。「市民生活行動調査」でも、今後、付き合いを大切にしたい人たちとして、「スポーツや趣味で知り合った人」の割合（二四・五％）が、「仕事・学校関係の人達」（二二・八％）を上回った。市民の交流のかたちに変化が生じている。

第五の社会変化としては、バブル経済とその崩壊をあげるべきであろう。バブル経済は地価の高騰をもたらし、住宅の取得を困難なものとするなど、社会にさまざまなゆがみを生じさせた。そしてその崩壊は、金融、投資、消費に至る全般的な経済不況を招き、倒産や雇用不安を発生させている。再び「市民生活行動調査」の結果を見ると、住みよい横浜のために今後、充実させたい点として、「快適な住宅に住めること」をあげた人がもつとも多く、二三・三％あったことは、市民のゆとりある生活への道がまだ遠いことを示すものといえる。

### 新たなまちづくりのための課題

以上見てきたように、変貌しつつある社会の中で横浜市民が望む暮らしやまちの姿とは、ゆとりや安らぎが実感できるもののような。安心して快適に暮らせるまちづくりのために、なにより市民一人ひとりにとって使い勝手のいい都市環境の創造がいま求められている。

つまり、生活者の視点にたつて横浜を再



労働時間の短縮が進み、家族や地域の人々との交流、趣味を楽しむことへの関心が高まっている。

21世紀の横浜市民のためにも、豊かな自然は大切にしたい



生していくこと、これが今後の横浜のめざすべき方向といえそうである。そのための第一の課題は、市民誰もが安心して暮らせる、支え合いの心を持ったまちづくりを進めることである。保健、医療、福祉の連携プレイによる施策の充実はもとより、市民が互いに家庭や地域で支え合う心を育んでいくことが重要となる。病気になることも障害をもつようになっても安心して医療や介護が受けられる社会、また障害

をもつ人も、もたない人も、共に当たり前に暮らせるまちの実現のために、ボランティア育成も含め、多くの取り組みが求められている。

第二の課題は、快適な住環境や豊かな自

然環境の確保である。市民のニーズに合った良好な住宅の提供や、地域の特性に応じた生活環境の整備など、快適な住環境を創出するとともに、大気、水、緑などの自然環境の保全を進め、ゆとりや安らぎの得られるまちを実現することである。

第三の課題は、スポーツや芸術・文化活動などを通じて、心豊かな市民生活を送ることのできるまちの実現である。身近なところで、自らがスポーツや芸術活動などにいそむだけでなく、高いレベルのスポーツや芸術に接し、楽しむこともできるような、幅広い取り組みが必要とされている。

第四の課題は、経済や交通など都市基盤を確立することである。産業や業務機能を強化し、自立した経済基盤を築くことは、国際化や情報化時代に対応した都市機能を構築するためにも、また市内に就業の場を確保し、職住近接によりゆとりある生活を実現するためにも、重要である。しかし、産業や業務機能強化は、市民がなかなか実感しにくい面を持っている。就業の場やゆとりある通勤の確保を含め、多様な買い物が楽しめる商業施設、魅力ある文化・スポーツ施設などの整備を通して、市民が都市機能の強化の必要性を身近に感じることのできるまちづくりが求められている。

また、交通基盤の整備も早急に取り組みなくてはならない課題である。これまでの、横浜駅を中心とした放射方向に加え、今後は課題となっている環状方向の交通網の整備を進め、通勤・通学時間の短縮化などを実現するとともに、他都市との広域的な

ネットワーク化を図る必要がある。交通網の整備は、用地の確保、資金の調達および回収など難しい問題を抱えており、その実現には長期間を要するが、利便性の高い都市の創出のためには、市民の理解と協力が不可欠である。計画されている交通網の整備が実現した場合、市民生活はどのように便利になるのか、その具体的にわかりやすい姿を提示していくなど、たえずきめ細かな情報提供が必要であろう。

第五の課題は、国際化の推進である。横浜は開港以来、諸外国との経済・文化交流の中で発展してきたといえる。国際都市ヨコハマのイメージは広く内外に浸透しており、今後、世界的規模での国際交流の場として新たな展開が期待されている。そのためには、まだまだ低い市民の国際交流への理解を深め、関心を掘り起こしたり、外国人にとっても暮らしやすいまちづくりを進めていくことが求められている。また、人と人、人と物や情報の出会う場所として、コンベンション（会議、催し）機能を充実させ、横浜を新たな文化創造の拠点に、また情報発信都市として強化していくことが必要である。

横浜市が、二十一世紀に向けてさらに飛躍するためには、これまで述べてきたさまざまな課題を克服し、市民が主役となっていくいきいきと活動できる「生活者のための都市」の実現に向けて、着実に歩んでいかなくてはならない。



互いに支えあい、安心して暮らせるまちづくりが急がれている

モノがあふれることだけが豊かさではない、そう考える市民が増えている

